

如月
に
ひく

調布市文化会館
たづくり
くすのきホール

日時

二〇〇〇年二月二〇日（日）
午後一時三十分開演

場所

調布市文化会館たづくり
くすのきホール

主催

調布三曲協会

ご挨拶

なぜ弾くのか、なぜ吹くのかと問われると、ひとことで答えることは難しく、あらためてその意味を考えずにはいられません。

さまざまな音楽や楽器の溢れるなかで和楽器の音色を選びとり、その演奏に我が思いを込めるということは、それぞれの意味の違いは有りながら一筋の大きな精神的支柱を共有しているように思えます。

我が音色に託したものを、聴きとって共感してくださったなら、演奏する者がより育てられたと思えます。

拙い演奏でございますが、初めて企画しました自主演奏会の、私たちの音色と願いを、是非お聴きとりください。

二〇〇〇年二月二〇日

調布三曲協会

自主公演実行委員会

演奏曲目

一、組曲出雲路

二、砧

三、摘草

④ 和 四、風のささやき

五、六玉川

2=19

洋

⑥ 六、箏と十七弦による三重奏曲

— 休憩 —

2=45分

⑦ 七、八島

着替え ↓ ④ 和

⑧ 八、葦のうた

⑨ 和 九、編曲八千代獅子

3=52

長尾内柳

一、組曲 出雲路

作曲 船川利夫

第一箏 柴田裕子

第二箏 原田眞樹子

十七絃 美蔦洋子

尺八 橋本洋

望郷の念を郷土の風景にたくしたものである。

I 「清水寺の暮色」 松並木に続いてうっそうとした老木の生い茂る道を登っていくと小高い山の中腹に木立に囲まれた清水寺がある。その鐘楼の鐘が鳴ると木陰を伝うその風が静かに暮色を運んでくる。

II 「祭」 社日神社の境内に笛が流れる頃、町には神輿がねり歩き、人々は祝い酒を飲んで安来節を唄う。祭のざわめきの中にもふと哀愁が漂うのは、日本の祭の独特の表情であろう。

III 「宍道湖の夕映」 静かな日のたそがれた宍道湖に夕映えがおとずれて、空も水も一瞬金色に輝く。一陣の夕風にさざ波がたつと波頭がきらきらとくだけ散る。秋ならば陽はつるべ落しに沈んで一刻の饗宴はたちまちに終わりをつげる。初夏の頃ならば天地の運行に自らをまかせしはと我を失う程の時間はある。

昭和三十五年十月十二日作曲

二、砧

作曲 宮城道雄

箏高音

上 口 房 子
松 田 孝 子

箏低音

村 田 章 子
田 代 せつ子

箏高音、低音による二重奏で三部形式である。作曲者の宮城道雄が青春期を過ごした京城を流れる漢江のほとりで洗濯のために棒で打つ水砧の印象を表現した作品である。日本古来の砧の打ち方とは違ったテンポの速い打ち方である。

曲の構成は序奏に続いて、低音箏のリズミカルな砧地に高音箏がテンポの早い第一主題を示す。第二主題はゆるやかな流れとなり、再びもとの第一主題に返って終わる。昭和三年の作曲である。

三、摘 草

作曲 菊原 検校

箏本手

角 岡 曉 子
井 坂 糸 子

箏替手

阿 部 力ヨ子
中 西 賀代子

尺 八

橋 本 洋
三 輪 輝 夫



菊原検校の四季の四つ物の一つで、春を謳ったもの。
明治後期の作品で、純然たる古曲の型式をもっており、
前弾、前唄、手事、ちらし、後唄となっている。しかし、
曲は古曲の暗さから抜け出して明るさがあるのが特徴であ
る。

四、風のささやき

作曲 石森康雄

箏 石森康雄

尺八 槁本竹咏

森の中でじっとしていると、風が話しかけてくる。そして、風に応える木々や鳥たち。朝・昼・夜と同じ所で聞く風の音が、その時により違った声となって聞こえてくる。昼下がりの森の中で、のどかなひとときに思いを寄せた曲。一九八六年作曲



五、六 玉川

作曲 鳥羽屋 里 長

箏

吉 川 和 博
美 蔦 洋 子

三 絃
田 村 博 寿

原曲は富本節の「草枕露の玉歌和」で、作詞者は不詳であるが作曲は鳥羽屋里長である。富本節といわれてもなかなかなじみのないジャンルだが、三絃と唄のみで構成される浄瑠璃の一派で常磐津から分かれ、重厚すぎず粋な音楽を特徴としている。これを山田流の四世山木千賀が箏曲に移曲したものでいわゆる浄瑠璃物としてあつかわれているものの中の名曲である。このような土台があるので、唄と一口に言っても「語る」という部分が重視され、河東節風の歌い出しから、謡がかり、鼓唄と変化に富み、また箏の手も組唄の旋律パターン、砧の手、虫の音の描写と全曲二十分を越す大曲をあきさせない。曲名の通り六つの全国の玉川を詠み込んで道行風に綴ってあるが、今回は摂津の津国、近江の野路、武蔵の調布の部分で玉川の美しい四季をたどってみる。

六、箏と十七弦による三重奏曲

作曲 藤井凡大

第一箏

渡辺泰子
原田眞樹子

第二箏

田代せつ子
美蔦洋子

十七絃

後藤好子
石森康雄

一九六〇年八月（作曲者二十代後半）の作品。はじめは速く力強い第一楽章とたっぷりした第二楽章で作られたが、後に第三楽章が書き足された。演奏者には、曲の若々しさを引き出せるような演奏をしてほしいというのが、作曲者の希望である。

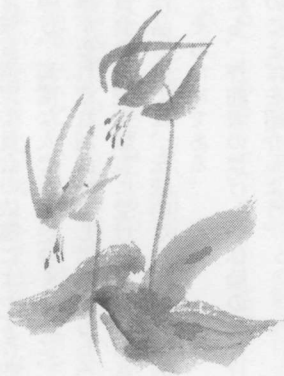


七、八 島

作曲 藤尾 勾当

三 絃 村 岡 ふ み
尺 八 門 傳 良 男

西国行脚の僧が八島の浦で源義経の亡霊に出会い、過ぎし源平の壇ノ浦の合戦の物語を聞かせてもらうという謡曲「八島」からとった地唄である。「また修羅道の関の声」以下終わりまでの歌詞をそのまま流用したもので藤尾勾当の作になる謡ものの代表曲である。途中に謡曲とは無関係の「西行法師はなげけとて」というクドキ風の部分が挿入されている。次第に緊迫してくる気分を表現し「けふの修羅の敵は誰そ」から謡曲のノリを移して、いかにも三味線でひく謡曲という曲調を作りあげている。



八、葦のうた

作曲 松本雅夫

第一筆

村岡ふみ
村田章子

第二筆

山下繁雄
柴田裕子
吉川和博

一九六三年に宮城賞選定委員会の依頼によって作曲された。初心者でも弾け、高度な人でも満足ゆくように、そして第一筆、第二筆がそれぞれ別に練習してもおもしろいようにという、委員会の要望を誠実に受けいれて作曲されている。松本雅夫作品の中では、伝統的な性格が比較的なま出ているのは、そのためである。

しかしこの曲にも、作曲者のけげしい体験の裏付けがある。作曲者自身のことばを紹介しよう。

「『葦のうた』の題は、もちろん雑草の葦と考える葦をかけたものですが、それよりもまず、ビルマ戦でインパール、コヒマに渡る前にイラワジ河の源流、チンドウィン河を渡河しなければなりません。大変な大河で、皆ここで銃撃をうけることを予想し、死を覚悟したところです。幸い渡河出来たところが、すごい葦の林で、夜中の渡河でしたが、今もはっきりと眼に浮かぶ位です。この後が日本軍の悲劇のはじまりですが……」

「葦のうた」という題名が予想させる、風にそよぐ葦の姿ではなく、生死の境を越えたところにあった、大きな葦の林なのである。それにもかかわらず、この曲が、やさしい抒情性をときにのぞかせるのは、作曲者のもつ本来の抒情性だろうか。

九、編曲八千代獅子

作詞 園原 勾当
原作曲 藤永 検校
編曲 宮城 道雄

第一等

渡辺 泰子
柴田 裕子
原田 眞樹子
松田 孝子

第二等

上口 房子
井坂 糸子
石森 康雄
角岡 曉子
後藤 好子
吉川 和博

三絃

中西 賀代子
阿部 力ヨ子
田代 せつ子
田村 博寿
山下 繁雄

十七絃

美 村 田 章 子
薦 田 章 子

胡弓 村岡 ふみ

小鼓 斎藤 曉美

篠笛 橋本 竹咏

尺八 橋本 洋

三輪 輝夫
門傳 良男

藤永検校作曲のよく知られた古典「八千代獅子」を宮城道雄が編曲したものである。「八千代獅子」は虚無僧尺八の本曲「獅子」をもとに作られ、曲の中ほどの歌詞に「世々は幾千代八千代ふる」とあることから「八千代獅子」の曲名が出来たと思われる。

第一等、第二等、十七絃、三絃、胡弓、尺八、篠笛、小鼓による大合奏曲として編曲されたもので、古典の現代化を試みた一連の編曲活動の中でも代表曲の一つである。小鼓の連打が前奏や曲尾に入っているがこれがこの曲を古典から新しい音楽へ衣がえすることに、大きな効果になっている。一九五二年作曲

歌詞

三、摘 草

前唄 長閑かさや雲雀もうたう弥生空すみれたんぽぼ

菜の花にひらりひらりと蝶の舞う

袖も軽けや乙女子の心尽しも愛らしく

待つ小鳥にも一束の家土産にせん はこべぐさ

後唄 よめ菜御形もとどりに籠に満ちけり春の色

入相つぐる小川辺やたなびきわたる夕霞

楽しさあかぬ野辺の摘草

五、六 玉 川

前弾

鳥が鳴く、東絡げの草枕、急がぬ旅も數島の、急がぬ旅も數島の、道を辿りて六玉川、(略)

〔合〕野路は由縁の色深く、〔合〕錦の萩の下葉まで、洩れてぞ置ける白露に、月は宿りて夜もすがら、恋しき人は鈴虫の、〔合〕振り捨てられて機織りの、夜寒を侘ぶる閨の戸に、〔合〕綴れさせてふ〔合〕きりぎりす、〔合〕誰を松虫、

〔合〕焦がれてすだく、我も思ひに堪へかねて、〔合〕

いとど心の遣る瀬なく、迫まる愀気の津の国や、〔合〕解けてしっぽり合槌の、それさへなくて小夜衣、〔合〕濡れる袂や袖の露、ひとり焦がれて繰り返す、打つに砧の音つれも、〔合〕絶えて梢の松風は、憂き妻琴の音に立てて、夜毎調べの床しさに、徒な浮き名も調布の、〔合〕

照る月の波に漂ふ玉川に、干してさらさら晒す白布、

〔合の手〕

立つ波は立つ波は、瀬々の網代に障へられて、流るる水

を堰き止めよ、流るる水を堰止めよ、(略)

筆の遊みを家土産に、〔合〕残す言葉は富本の、栄え久しき里の長、めでたくこそは聞こえけれ。

七、八 島

釣りのいとまも波の上、霞わたりに、沖ゆくや、海女の
小舟のほのほのと、

見えてぞ残る夕暮に、浦風さへも長閑にて、しかも今宵
は照りもせず、

曇りもやらぬ春の夜の、朧月夜にしく物はなし

西行法師はなげけとて、月やは物をおもはする、闇は忍
ぶによかよか

うななせでたぞ、きそぎそくもれ

又修羅道の関の聲、矢叫びの音、震動して

けふの修羅の敵は誰そ、なに能登の守教経とや、

あら物々しや、手並は知りぬ

思ひぞ出づる壇の浦のその船軍、今は はや閻浮に

かへる生死の海山一度に震動して

船よりは関の聲、陸には波の楯、月にしらむは劔の光、

潮に映るは、

兜の星の影、水や空、空行くも又雲の波の、打ち合ひ、さ

し違ふる、

船軍のかけひき、浮き沈むとせし程に、春の夜の波より

明けて、

敵と見えしは、群れ居る鷗、関の聲と聞えしは、浦風な

りけり高松の、

浦風なりけり高松の、朝あらしとぞなりにけり。

九、 編曲八千代獅子

いつまでも 変はらぬ御代に

合ひ竹の 代々は幾千代

八千代経る

雪ぞかかれる 松の二葉に

雪ぞかかれる 松の二葉に

終演予定 四時

調布三曲協学会員教授所

〔箏絃〕

阿部	カヨ子	〒一八二一	調布市深大寺東町八―八―六	〇四二四(八五) 二八八三
井坂	糸子	〒一八二一	調布市国領町六―二〇―七	〇四二四(八三) 九二二五
石森	康雄	〒一八二一	調布市染地二―二―二	〇四二四(八三) 三七六七
角岡	曉子	〒一六六一	杉並区高円寺南一―六―二四	〇三(三三一四) 二二〇一
上口	房子	〒一八二一	調布市東つつじヶ丘三―一―三七	〇三(三三〇五) 五四七七
後藤	好子	〒一八二一	調布市布田一―四五―六―六〇六	〇四二四(八五) 八九九三
駒井	孝子	〒一八二一	調布市深大寺北町一―二―二	〇四二四(八二) 八三二三
佐藤	吉和	〒一五七一	世田谷区南鳥山五―二―一 宮本ビルD	〇三(三三〇八) 八一〇五
柴田	裕子	〒一八二一	調布市柴崎二―一三―三	〇四二四(八六) 六三四五
田代	せつ子	〒一八二一	つつじヶ丘ハイムA―四〇四	〇三(三三〇〇) 五七七三
田村	博寿	〒一八二一	調布市仙川町二―二―二	〇四二四(八四) 〇一五九
角田	央子	〒一九一	調布市上石原二―三―二〇―三〇二	〇四二(五九二) 七二三〇
中西	賀代子	〒一八二一	日野市程久保六八三―九	〇四二四(八二) 〇九〇〇
原田	眞樹子	〒一八二一	調布市布田四―三―五	〇四二四(八五) 三三七九
		〇〇二六	調布市小島町二―五四―四 ライオンズプラザ調布シティA―一―号	

松	美	村	村	山	吉	渡	〔尺八〕		橋	橋	三	門
田	薦	岡	田	下	川	辺			本	本	輪	傳
孝	洋	ふ	章	繁	和	泰			竹	竹	輝	良
子	子	み	子	雄	博	子			咏	咏	夫	男

〒一八二一	〒一八二一	〒一八二一	〒一八二一	〒一八二一	〒一八二一	〒一八二一			〒一六九一	〒一六九一	〒一八二一	〒一八二一
〇〇一七	〇〇二四	〇〇二四	〇〇二四	〇〇二四	〇〇二四	〇〇二四			〇八三三	〇八三三	〇〇三四	〇〇三四
調布市深大寺元町四―三五―一―二―一〇七	調布市布田五―二―一三五	調布市布田二―七―四調布ハイツ二〇一号	調布市西つじヶ丘一―一〇―四―四〇三木内方	調布市国領町八―一―三五―六―五〇四	調布市西つじヶ丘四―三六―四	調布市染地三―一―八九〇			八王子市めじろ台四―二九―八	八王子市めじろ台四―二九―八	調布市下石原三―七―一―一―四〇一	調布市下石原三―七―一―一―四〇一
〇四二四（八三）二三七九	〇四二四（八八）〇七五〇	〇四二四（八二）一二四一	〇四二四（八四）三八六八	〇四二四（八五）三七八九	〇四二四（八三）三三六九	〇四二四（八六）五一七六			〇四二六（六六）〇三三八	〇四二六（六六）〇三三八	〇四二四（八六）七七二五	〇四二四（八八）三三三三
											〇四二四（八六）四四七二	〇四二四（八六）四四七二

アナウンス

山口宮子

佐藤あや子

舞台進行
照明音響

琴光堂 中島隆



調布三曲協会事務局

石 森 康 雄

〒一八二一〇〇二三

調布市染地二一二一二

電話〇四二四（八三）三七六七